

ICT における業務支援システムの開発
—ICN,ICMT のためのラウンド業務支援を目指して—
Development of Work Support System for Infection Control Team (IS-ICT ver. 4)

提出日

2016年1月28日

指導教授

齋藤 正武 准教授

中央大学商学部

経営学科	12C1113051F	関口 詩七
商業・貿易学科	12C3149002C	前田 紗貴子

ICTにおける業務支援システムの開発
—ICN,ICMTのためのラウンド業務支援を目指して—

Development of Work Support System for Infection Control Team (IS-ICT ver. 4)

齋藤正武ゼミ

12C1113051F 関口 詩七

12C3149002C 前田 紗貴子

近年、インフルエンザやノロウイルスなどによる感染症が度々報道されている。特に、免疫力の低下した患者が多数訪れる医療機関において、感染症は大きなリスクとなっている。院内感染による被害が拡大すると、患者の命に危険が及ぶこともあり、医療機関が抱える問題の1つとなっている。

病院では、こうした院内感染対策のために感染制御部が存在する。この部署では感染対策の啓蒙、病原体の蔓延予防や検出、感染症発生時の対応などを行っている。そして重要な業務の一つに、担当の医療従事者への感染症の情報連絡・共有がある。病院内の集団感染は時間が経過すればするほど被害が広がるため、感染症が発生した場合、医師や看護師にすぐ連絡を行わなければならない。しかし緊急の場合を除き、通常医療従事者間での情報共有は、週に1回程度で、迅速に連絡ができる体制になっているとは言えないのが現状である。このような状況の中、情報共有のシステム化を行うことが望ましい。

そこで、本研究は酒井(2013)、高橋(2014)、小山田・富岡・森上(2015)の既存研究に引き続き、獨協医科大学のICT(Infection Control Team; 感染制御チーム)をモデルに情報共有のためのシステム開発を行った。特に、今年度は、ICT所属看護師(ICN)と検査技師(ICMT)と薬剤師らで病室を回るラウンド業務を対象にして、その業務分析およびそれら業務で共有すべき情報のシステム化について取り組んだ。具体的には、iPad miniをラウンド業務に持参し、本研究で開発したシステムの活用時を活用していない時の業務フローおよび効率性を比較した。

既存研究では、ネットワークを介さずにオフラインの状態で使用可能なシステムの開発を行った。しかし、業務実態の把握が不十分であったため、病院側の求める目的と開発側の想定する機能の目的との不一致が問題となった。本研究では、既存研究で問題となった業務実態の把握に関して、ヒアリングを通じてシステムの目的を明確にし、より実際の業務に沿ったシステムの開発を行った。

獨協医科大学病院の感染制御センターでシステムの有効性を検証した結果、改良点はあるものの、前向きな意見を頂戴することができた。今後の課題は、ラウンド業務により沿ったシステムの開発及び外部データとの相互性の検討である。最終的には実際のラウンド業務へ導入して頂けるようなシステムへ